第 498 号
2025 年 1 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 520 回(2025 年 1 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:10 人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

冬に読みたいおすすめ本

1月は「冬に読みたいおすすめ本」をテーマに開催しました。参加者各自が冬に読みたくなる児童書を持ち寄り、紹介しました。絵本、民話、物語などさまざまな本が集まりました。

次に、読書会に参加した方のおすすめ本と感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●『赤毛のアン』(モンゴメリ/原作, 村岡 花子/訳 ポプラ社)
子どものときに読んでいた。大人になってからも読み返したくなる本。アンと家族、まわりの人たちとの結びつきが好き。

●『きらきら』(谷川 俊太郎/文, 吉田 六郎/写真 アリス館)
雪の結晶の写真集に、谷川俊太郎の詩がついている本。雪の結晶はひとつひとつ違う。そして、添えられている谷川俊太郎のシンプルな言葉がじわっとくる。きれいなだけではなく、雪の恐ろしさも書かれている。冬の宝物。

●『おばあちゃんのすてきなおくりもの』(カーラ・スティーブンズ/さく, 掛川 恭子/やく, イブ・ライス/え のら書店)
ハタネズミのおばあちゃんを巡る4つの物語。年をとってベットから起きられないおばあちゃんの家にネズミやモグラが訪ねてきて、おばあちゃんはおはなしを聞かせてくれる。誰かを思うこと、人を労わることが伝わる、寒い季節に心が温まる一冊。

●『十二の月たち』(ボジェナ・ニェムツォヴァー/再話, 出久根 育/文・絵 偕成社)
スラブ民話。寒い冬にスミレやイチゴを取りに森に来た娘を、十二の月の精が助けてくれる。描かれている森の暗さが素朴で良い。ヨーロッパの暗い森、寒さが感じられる色彩。民話の良さ、奥深さが感じられる。

●『飛ぶ教室』(エーリヒ・ケストナー/作, 池田 香代子/訳 岩波書店)
寄宿学校でのクリスマスの物語。こんな学校生活いいな、とほっこりする。格差や親子の情なども描かれている。個性的な子どもたちが出てきて、面白い。ドイツの寒い冬を感じる。

●『荒野にヒバリをさがして』(アンソニー・マゴーワン／作, 野口 絵美／訳 徳間書店)
2020年カーネギー賞受賞作。復活祭の日に兄弟二人でヒバリを探しに行くが、季節外れの吹雪にあい、帰れなくなってしまう。知的障害がある兄と、兄を負担に感じず支える弟。二人の兄弟が良い。シリーズで出ていて、装丁も好き。

●『うまかたやまんば』(おざわ としお/再話, 赤羽 末吉/画 福音館書店)
馬に荷物をのせて山を越えていたうまかたが、やまんばに荷物や馬を食べられてしまう。最後は、うまかたの機転でやまんばを退治する昔話。馬を食べるやまんばは怖いのに、うまかたにあっさり騙されてしまうところがおかし味があって好きな冬の話。

●『風が強く吹いている』(三浦 しをん/著 新潮社)
箱根駅伝を目指す大学生の物語で、新年から笑える面白い話。箱根駅伝に出場するために集めた10人のうち、陸上経験者は3人という、めちゃくちゃな設定。大学生らしい成長もあり、個性あるメンバーの抱える問題も書かれていて読み応えのある一冊。

●『飛ぶ教室』(E.ケストナー／作, 最上 一平／文, 矢島 眞澄／絵 ポプラ社)
クリスマスを寄宿舎で過ごす少年5人の物語。子どもたちよりも大人に目がいってしまった。子どもたちを、できる限り支えようとする正義さんや禁煙さんなどの大人が良かった。

●『長い冬』(ローラ・インガルス・ワイルダー/作, 谷口 由美子/訳 岩波書店)
長く厳しい冬を飢えと戦いながら家族が寄りそって暮らす様子が描かれている物語。少ない食料を工夫する母、体が弱っても頑張る父、お互いを思いやり耐える子どもたち。悲惨な日々を力強くさえ感じた。冬の描写が素晴らしい本。

次回 2月13日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『西遊記』上・中・下 呉 承恩/作, 君島 久子/訳, 瀬川 康男/画 福音館書店
※申込み・参加費は不要です。